西川監督から贈る言葉

岸は､京都明徳高校時代の恩師である中馬先生から連絡を頂き｢大阪ガスで野球を夢半で諦めなければいけない選手がおるので、一度見てもらうわけにいけませんか」と11月の終わりに連絡を頂きました。

既に松源さんの面接も終わっていましたが、桑原理事長に伺いをたてたところ「一度見て頂いて性格も含め監督が良いと判断したらいいですよ」と了解を得ての11月30日のセレクションでした。

左の黒川にはタイミングが合いませんでしたが、宮迫から右中間に2本の特大本塁打を放ち､サッカー場で子供とキャッチボールをしていた桑原理事長も球場に飛んできたのを思い出します。

もちろん1年目から主軸として活躍をしてくれるのですが、春先の都市対抗予選は調子が上がらず少しスランプ気味でしたが、「夏男」の異名通り、夏前から調子をあげ、打撃練習を見ていると｢えげつない」と何回呟いたか、また原井コーチも「なかなかここまで飛ばす選手はプロにもいませんよ」足も肩も強く、抜群の**「身体能力」**の持ち主で、本当に上に行ける選手だと思っていました。

また、岸が放った多くの本塁打を見てきましたが、一番思い出深い本塁打は、第40回クラブ西近畿予選での県警桃太郎戦で劣勢に追い込まれた状態から放った本塁打は、パナソニック球場のライト奥のネットを越して、マンションに打ち込むような当りにベンチは鳥肌と歓喜が一気に渦巻き、今のマツゲン箕島の古を築いたといっても過言ではないと思います。

また２年目の都市対抗近畿予選での大阪ガス戦で見せた「悔し涙」は岸自身を一歩も二歩も成長させたと思います。

最後の試合となったトヨタ戦を終えた後、親父さんが挨拶に来てくれて「一時は道を閉ざされた、好きな野球を自分で辞める時を決められ、こちらでお世話になって本当に良かったと思います。ありがとうございました」の言葉に全てが凝縮された５年間だったかも知れませんね。また、先に引退した穴田との練習時からの掛け合いは、チームのムードを盛り上げ、他チームからは「ベンチからの声や盛り上がりが半端ではないので、本当にやりにくい」と言った声が聞こえてきました。

岸・穴田コンビの掛け合いは私個人としては本当に好きでした。これから真剣な野球を離れますが、岸の陽気な性格で周りの人間を惹きつけながら頑張って下さい。

５年間本当にご苦労様でした。